



お生 ひろ 山形 浩 (評論家)

前回この欄を担当したあと、ネットにおける情報公開の威力をさまざまと見せつけられる事件が起きた。むろん、それは国内では尖

ったし、政府の対応(またはその不在)を評価する一定の基準ができたことは、多くの人にとって十分な価値のあることだった。

だからこそ、ビデオを公開した海上保安官には同情論が多い。そしてまた、それが公開の場として既存のメディアに頼らず、インターネットに頼ったというこ

山形浩生、明治学院大教授の稲葉振一郎、批評家の宇野常寛の3氏が交代で執筆します。

本質的ジャーナリズムの実践だ

聞ビデオ、そして世界的にはウィキリークスをめぐる騒ぎだ。

ぼくも含め、多くの人は尖閣ビデオの公開には大喝采した。政府が明らかに普通でないことをしているのに、国民は何が起こったかも報されず、そして政府は露骨に介入しているのに、それを認めず「検察の判断に任せた」などと意志決定の責任すら取らない。

とは、ネットの発信力を如実に示すとともに、既存メディアに対する不信を示すものでもある。ぼくだってそうしただろう。いまの日本のメディアは、政府や中国ともめるのを恐れ、あのビデオを持ち込まれてもたぶん握りつぶしただろうから。

尖閣とウィキリークス

愛想をつかしているとか、サウジの王族が酒池肉林の乱痴気パーティーにふけっているとか、日本の政治が世界的にバカにされているとか。外交的な面子はあるだろうが、常識のある人なら、まあそんなものだろうとしか思わない話だ。

むしろ衝撃的だったのは、同サイトに対するさまざまな弾圧だった。クレジットカードやネット送金サービスが一斉に取引停止、サーバーを提供していたア

マゾンもサービス停止、そして主宰者のアサンジ容疑者は、コンドームがどうし中は騒然となっていた。情たとかいう死ぬほどくたら報そのものは、欧州の有力新聞がチェックをかけており、信憑性は保証付きた。とはいっても、公開された情報の中身自体は、さほど衝撃的なものは少ない。アメリカと中国が北朝鮮に

でジャーナリズムが変わるといえば、市民記者なる連中がブログで感想文を書き散らすようになるとかいう話だった。でもいつのまにか、現実はそのをはるかに超えていた。政府が隠そうとする情報が、既存のメディアを無視して、そのままネット上で万人に公開されてしまうとは。

でも、ジャーナリズムの相当部分は、取材を通じて記者たちが、政府などの必ずしも公開してほしくない

情報を人々に知らせる活動だ。そしてネットはいまや、それをずっと直接的な形で実現してしまっている。ネットはジャーナリズムを変えるところではない。最も本質的な形のジャーナリズムの実践が、いまやインターネットに担われているのだ。それに対する弾圧は、ジャーナリズムそのものへの弾圧なのだということが、既存メディアの人々こそもっと声をあげるべきだ。そして、それは多くの「識者」や政府関係者たちの秘密性の根拠にも疑問をつきつけている。「こんなものを見せたら政府の信用が失墜する」「国民が感情的に反応する」とかれらは懸念するけれど、本当に公開してみると、そんな様子もない。政府が秘密にすべきだと思っていることは、本当に秘密にする必要があったのか? 一連のネット情報公開事件は、こうしたいまの政治の基本的な前提すら揺るがすものだということ

を、もっと多くの人が認識すべきだと思うのだが。